

地歴連携による授業開発の試み

— 関東大震災をテーマとして —

大庭 大輝

一 日本史で「防災」を扱うことについて

本実践は筑波大学附属高校の二年生必修科目「日本史A」の単元「第一次世界大戦と日本」中において、「関東大震災」⁽¹⁾をテーマに地理の担当教諭の中村光貴が前半一時間を、私が後半一時間を担当したものである。前半一時間分の実践については、『歴史と地理』第七二三号「地理の研究」一九八号(二〇一八年四月)を参照されたい。

さて、高等学校を含む教育活動全体において、防災の視点が重要であることは昨今では誰もが認めるところであろう。直近でも二〇一七年に九州北部豪雨、二〇一八年六月に大阪府北部を震源とする地震、七月に西日本豪雨などが発生し、防災に対する関心は高まっている。では、高等学校地理歴史科、特に日本史において、このような災害や防災というテーマはどう扱わ

れるべきだろうか。本実践に先立って、「防災の日」に関する新聞記事を引用しながら、生徒たちに「歴史の授業で過去の災害を学習する意義は何か」を問いかけてみた。答えは、「(プレート)の動きなどから)地震の周期を一般化できる」「起こりうるリスクを予想し、ハザードマップの作成などに役立てる」「過去の文献などから地震の前兆を探る」「津波などに関する口碑伝承を継承する」などであった。

いかがであろうか。どれも重要な視点ではあるが、ここで気になるのは、「誰がそれを行うのか」というその主体である。右に挙げた彼らの回答は、最後の事例を除けばいずれも専門的な知識を要し、ビッグデータの解析などを必要とするものである。いざというときのために、国や自治体に任せきるのではなく一人一人が防災の担い手だと位置づけるならば、これらの回答から、生徒たちが捉えた災害学習の意義と、彼ら自身ができること、すべきことの間⁽²⁾に存在する距離に気づくのではなかろうか。

では、より「自分ごと」として災害を捉えるために、日本史という科目においてどのような学習活動が可能だろうか。⁽³⁾本実践はこういって関心に基づいたささやかな試みであり、加えて歴史科目と地理科目における見方や考え⁽⁴⁾方、得られた知識を複合的に活用させる授業についての一つの提案である。

二 授業のねらいと資料の例示

先に述べた課題を念頭に、授業のねらいの一つを防災についての当事者意識の喚起においた。それを実現するために、地理との連携を意識しつつも歴史学習の基本である資料、特に文字資料（史料）の重要性を再認識してもらうことをもう一つの目標とした。授業では、まず導入として授業者がプレゼンテーションソフトを使い前時の復習と、本授業に向けた関心や意欲の喚起を、続いて各種資料の紹介とその読み取り方の確認を、講義と生徒との問答を中心に行った。その後、生徒たちがグループごとに資料を読み、気づいたことや得られた知見をグループ単位のレポートにまとめた。そして、最後に前時の活動にも触れながら、あらためて歴史学習で震災を取り上げた意味を確認して計二時間の関東大震災に関する授業が完結した。以下、展開に沿ってその概要を述べていきたい（表1参照）。

まず、前時に地理の観点で学んだ関東大震災の発生日時、規模、震源、被害の概要を復習した。その上で、歴史の観点から震災を学ぶことを意識づけるために、導入として一つの問いかけをした。熊本地震（二〇一六年）・新潟県中越地震（二〇〇四年）と、阪神淡路大震災（一九九五年）・東日本大震災（二〇一一年）を例に、その名称が異なるのはなぜかというもので

| 時間 | 学習活動 | 指導の手立て | 評価 |
|-----|---|--|---|
| 3分 | 前時の復習や定期考査の問題を手掛かりに、学習課題を把握する。 | 生徒自身の意見を紹介して関心をひきつけると共に、既存の概念を揺さぶるよう工夫する。 | 導入の問いに関するやり取りなどから。 〔関心・意欲・態度〕 |
| 7分 | 新聞資料や体験記を手掛かりに、資料の読み取りの手立てと本日の学習課題について把握する。 | 着目点を絞ることによって、生徒が資料をどう読めばよいか理解できるよう援助する。 | 『震災彙報』、『京都日出新聞』、田山『東京震災記』、河竹『遭難記』、などの読み取りから。 〔資料活用の技能〕 |
| 15分 | 授業前半で示された事例を手掛かりに、グループごとに協力して課題に取り組む。 | 作業内容が把握できているか、協力して取り組んでいるか、各グループの作業の様子を確認し、適宜助言する。 | 資料から読み取った情報の解釈・意義付けとグループでのレポートの作成から。 〔思考・判断・表現〕 |
| 20分 | 各グループの作業で得た気づきを共有し、まとめの課題に取り組む。 | 題意に沿ったレポートになっているか、本時のまとめとして適切な内容になっているか、観察する。 | |
| 5分 | 本時の学びを振り返り、自己評価を行う。 後日アプリ（Google Classroom）内で相互評価を行う | 本時の作業をまとめ、生徒自身による更なる気づきや学びのまとめの動機付けを行う。 相互評価について指示する。 | 個人の感想やレポート、相互評価から。 〔関心・意欲・態度〕 |

表1 本時の展開

ある。これは、過去の災害についてどのように名付けるかということの中に、政府および私たちがその災害に伴う被害や影響をどのように捉えているかという評価が含まれていることに気づいてもらうためである。ある災害が単なる自然現象ではなく、「震災」として捉えなおされることで、人々の営みについて学ば歴史学習の対象となることが意識される。

続いて、三種の資料を紹介しつつ、そこから関東大震災について何を明らかにすることができるのか、教室全体で確認した。一つ目の資料は『震災彙報』である。『震災彙報』は、震災対応の中で勅令三九七号によって定められた臨時震災救護事務局が、一九二三年（大正十二）九月二日午後七時に第一号を発行した公報であった。帝都の各新聞社が被災して情報が途絶し、内務省をはじめとする官庁も被害を受けて官報すらガリ版で出された中で、被災した人々にとっては貴重な情報源だったと思われる。この『震災彙報』からはさまざまな情報が得られるが、授業では第五号（九月四日午後十一時発行）に掲載された、警視庁による被災者救護の状況を取り上げた。震災発生から三日が経過しようとしている時点で、本部（この時点では府立第一中学校と思われる）でも医師一人当たり一六人程度の患者を抱えているが、とりわけ被害の大きかった深川西平野署管内は

医師一人（助手四人）で四九三人の患者を抱えている。被災者への手当てが全く行き届かなく、かつ地域的に大きな偏りがあることが見て取れるのである。

二つ目の資料は、『京都日出新聞』（九月三日付、付録）の記事である。⁽⁵⁾この記事では、元老の松方正義の死去という誤報や朝鮮人の暴動に関する記事の削除の跡が確認される。先述の通り東京の主要新聞社が新聞を発行できていない点、一方で独自に情報を得た地方の新聞が震災の被害を伝えていたものの、情報が錯綜している様子を読み取ってもらった。

以上の活動のねらいは、二種の文字資料を活用することによって、そこから情報を引き出し、歴史的な見方や考え方を働かせてその情報を解釈し、意味づけられることに着目させるものである。

最後に提示した資料は、文学者らが残した震災体験記である。⁽⁶⁾具体的には、豊多摩郡代々幡町（現在の渋谷区）で被災した作家の田山花袋と、本所区南双葉町（現在の墨田区）で被災した演劇研究者の河竹繁俊の震災体験記である。震災後の回想であることを差し引いても、「このくらいですめば、そう大して大地震というほどのこともない」という感想を記した田山と、「大風の通り過ぎる時よりも、もつと根本的に凄惨な光景が、たちまちそこに展開された」という河竹の体感には大きな差が

ある。⁽⁷⁾その差はなぜ生じたかと問いかけたとき、生徒たちは前時に学んだ東京市内での地形や地盤による震度の差を思い起こし、歴史と地理の見方・考え方を複合的に働かせ、いわば「主観的」な体験記という情報と、「客観的」な地形や震度という情報が結び合うことに気づくのである。

三 グループレポートの作成と評価

このように、生徒は資料から震災当時の生々しい状況が復元できることを知り、地理的な情報と歴史上の資料が結びつくことで明らかになることに気づいた上で、新たに提示されたさまざまな資料から、みずから震災からの教訓として重要な情報を掘り取り、グループレポートという形でまとめることになる。以下は提示した資料の一部である。

田山花袋『東京震災記』（一九二四年）、河竹繁俊「遭難記」（一九二四年）、『小樽新聞』号外（一九二三年九月二日・三日付）、『大阪朝日新聞』号外（一九二三年九月二日）、「朝鮮人暴動に対する流言に関する取締通牒」（一九二三年九月三日）、「臨時震災救護事務局警備部打合せ」（一九二三年九月三日）、染川藍泉『震災日誌』（一九二三年）

すべての生徒がすべての資料を扱うにはさまざまな制約もある。

るので、A―主に体験記を中心に扱うグループ、B―主に新聞記事を扱うグループ、C―朝鮮人をめぐる流言飛語や情報統制を扱うグループの、ひと班五人程度で三種のグループに分けて資料を分析させ、A↔Cそれぞれで得た知見を持ち寄って共有するジグソー学習の形式を採用した。グループレポートは、A↔Cそれぞれの資料を読み解いた生徒が得た情報を総合して作成することになる。具体的には、(1)今回提示された資料から分かること、学べること、(2)これらの資料は、他にどのような性格の資料を加えるとさらに活用できるか、(3)授業全体を通じて歴史の観点から震災を学ぶ意義、の三点を柱とした。

ちなみに、Aに与えた資料群からは、避難途中にどういった混乱が起こっているか、その混乱の中で人々はどう行動したかを生徒が読み取ることを期待した。Bは地方新聞は震災をどのように伝えているか、どの程度、そしてどういった誤報が生じているか、Cではどのような流言飛語などが、なぜ発生し、防ぎ得なかったのか、がそれぞれ読み取られることを一応想定していたが、資料にはその他にも豊富な情報が内在されている。そこから生徒自身が何らかの気づきを得、震災の教訓として認識することが最大の目標である。

実際に生徒たちが作成したレポートを紹介したい(図1参



図2 「大正十二年九月 帝都大震災火災系統地図」(部分, 山本美編『大正大震災火災誌』付録)

まとめを行った。授業のポイントをまとめるとともに、「帝都大震災火災系統地図」(図2参照)を基に、いわゆる「神田区和泉町の奇跡」を地図と報告書画面から紹介し、地理情報と文字情報を総合する有用性を改めて確認した。そして最後に、田山の前掲書より次の文章を紹介した。

震災記と言っても、これは私の見たり聞いたりしたことだけで、決して完全なものではない。もっと本当に詳しく知ろうと思うのには、いろいろな記録も、いろいろな新聞記事も引張り出して見なければならぬのは勿論である。しかし、そうしたものは多くは記述と説明で、描写はしていないから、どうということがあったということは知れても、本当の光景や感じや気分はわからない。

「情報の混乱などビッグデータだけではわからない大災害の要因を知った」「自分が混乱しているときにどう対処できるか考えることが大切」「人の体験談が平和学習以外で実質的に役立つことが意外」「体験記と地図の比較関連付けから価値のある情報が得られるとわかった」などの生徒個人の授業プリントの感想を読むと、「客観的」なデータが重んじられる時代だからこそ、田山の最後の一文が持つ重みを感じ取り、一人一人が直面する問題として災害を捉えなおしてくれたようである⁹⁾。

註

- (1) 本実践において、関東大震災の実態や概要については主に北原糸子『関東大震災の社会史』（朝日新聞出版、二〇一一年）、越澤明『東京都市計画の遺産——防災・復興・オリンピック』（筑摩書房、二〇一四年）、鈴木淳『関東大震災——消防・医療・ボランティアから検証する』（講談社、二〇一六年）、山本美編『大正大震災火災誌』（改造社、一九二四年）、吉村昭『関東大震災』（文芸春秋、一九七七年）を参照した。
- (2) 例えば、中央防災会議（内閣府）の災害教訓の継承に関する専門調査会が関東大震災を含む過去の災害に関する詳細な報告書を出しており、ウェブ上で誰もが利用可能な状態で公開されているが、生徒で知るものは皆無であった。授業においても、こういった成果を積極的に利用していく必要がある。
- (3) 例えば、採録テーマに制約はあるにせよ歴史学研究会編『歴史を社会に活かす——楽しむ・学ぶ・伝える・観る』（東京大学出版会、二〇一七年）などに防災の観点が取り入れられていないのは歴史学や歴史教育の課題の一つである。歴史の視点から災害を取り上げた生徒も手に取りやすい近著としては、磯田道史『天災から日本史を読みなおす——先人に学ぶ防災』（中央公論新社、二〇一四年）がある。
- (4) 新学習指導要領に示された、獲得の対象ではなく「はたらかせる」ものとしての見方や考え方については、澤井陽介・加藤寿朗編『見方・考え方 社会科編——「見方・考え方」を働かせる真の授業の姿とは?』（東洋館出版社、二〇一七年）を参考にした。
- (5) 全国の各新聞の震災記事は『シリーズその日の新聞 関東大震災』上・下（大空社、一九九二年）にまとめられている。
- (6) 文学作品に見られる震災記事については、石井正己『文豪たちの関東大震災体験記』（小学館、二〇一三年）、児玉千尋『関東大震災と文豪——成蹊大学図書館の展示から』（『成蹊国文』四七、二〇一四年）を参照した。特に後者は個人全集等に採録された震災関係文献のリストなどを掲載して便利である。今回の実践では活用できなかったが、生方敏郎『明治大正見聞史』（中央公論社、一九七八年）には、勤務校所在地近辺の震災時の生々しい描写がある。こういった資料も今後扱いたいと考えている。
- (7) 田山花袋『東京震災記』（河出書房新社、二〇一一年、初出は一九二四年）および河竹繁敏『遭難記』（前掲『大正大震災火災誌』所収、初出は一九二三年）
- (8) なお、授業では各グループが作成したレポートについて、教育支援アプリを活用してオンライン上で相互評価を行っている。
- (9) なお、本実践を含めた本校地理歴史科の実践の概要については、二〇一八年二月九日に行われた「平成二十九年度国立教育政策研究所教育課程研究指定校事業研究協議会」にて発表を行った。その場でご指摘いただいた歴史科目独自の見方・考え方の指標の明確化や、防災意識の生徒への定着のための更なる実践については今後の課題とした。
(おおば・だいき／筑波大学附属高等学校教諭)